吉備国際大学研究紀要
（人文・社会科学系）
増刊号，1－10，2017

サッカーの１対１ディフェンス技術に関する研究
－ボール奪取行為前のフェイント技術使用の観点から－

松下　健二*・高藤　　順**

Study of 1 on 1 defense technique in soccer football games
－From view point of using feint technique before ball capture－

Kenji MATSUSHITA*　Jun TAKAFUJI**

Abstract

In this study defender examined the effectiveness in 1 on1 offence and defense before an assailant took an attack action for an assailant when defender feinted assailant positively and tried before ball capture. Generally, the defender classified roughly for an assailant and defender leave the constant space and stand face to face or defender perform a defense action such as cutting down a distance and facing each other before ball capture. Defender often feel these action in a weak point for the attacker. It was suggested that the higher effectiveness of defense obtained when defender used these action in a weak point for the attacker before feint doing.

Research that consists of two experiment Experiment 1: When do not know the defense that defender assumes the weak point of the assailant; experiment 2: defender examined it from an aspect when defender knew it.

The result of the study was evaluated from the number of the success of the ball capture. 15 times of success during 31 trials was seen in experiment 2 and 8 times of success during 32 trials in experiment 1.

The result of experiment 1was 25% of success rates, and the remarkable existence of the effectiveness was not accepted in comparison with 1 on 1 normal result. However, result of experiment 2 was recognized that 48.8% was seen in the ball capture success rate and there was the effectiveness conspicuously.

Key words　：soccer,1 on 1, defense,feint
キーワード：サッカー、1対１、ディフェンス、フェイント

---

*吉備国際大学スポーツ社会学部(非常勤)
**吉備国際大学スポーツ社会学部
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
Kibi International University
8, Iga-machi Takahashi,okayama,Japan(716-8508)

1．目　的

現在のサッカー競技の隆盛は過去における著名な選手の華麗なボールさばきに人々が魅了されたことがその一因である。著名な選手は各ポジションにみられるが、特にフォワード、ウイングであったペレ、クライフ、マラドーナ、ジョージ・ベスト、ガリンシャなどドリブルを得意とし、敵の選手をスキーのスラロームのように抜いていく技に人々は熱狂した。現在でもドリブル突破の魅力は大きく、ロナウジーニョ、ジダン、ロナウド、メッシなどが有名である。これらの選手はいかにして防御者の逆をとるか、スピードで置き去りにするかなどのトレーニングを積んできた。逆に防御者はいかに自分の裏（後ろ）を取られないようにするかについて、素早くターンする。ボールが長く出た瞬間に体を入れる。敵のボールタッチのタイミングに合わせてブロックをする。スライディングでブロックする。など努力を重ねてきた。しかしながら、球技においてはボール保持者が絶対的に有利であるとされている。なぜならば、次のプレーは攻撃者がアクションを起こしたのちに防御者は対応のアクションを起こすため、すべてにおいて後れを取るためである。それでも相対峙したときに相手のフェイントにかからないようにボールのみを注視する。もしくは、縦方向を切って中に行かせる、横方向を切って縦方向に行かせるなど、相手のドリブルの方向を作為的に作り上げ、その方向に抜くために大きくボールを出したときに体を入れてボールを奪い取る方法が講じられている。しかしながら前述のごとく、先を越される可能性が高い。

そこで攻撃者のアクションに対応するのでなく、先に防御者がアクションを起こし、積極的にフェイントを仕掛け、攻撃者を慌てさせてボールを奪い取る方法もあるのではないかと考えた。これまでに出されたサッカー関係の書籍[1) 2) 3) 4) 5) 6) 10) 11)]において、攻撃者が1対1において防御者を抜き去るために使用されるフェイントに関するものは多く見られたが、防御者がボールを奪取するために使用されるフェイントについて紹介されたものはほとんどなく、対峙した状態から半身の姿勢で間合いを図り、まず後方へステップし、相手が誘いにのってボールを前に運んだで、後ろ足を踏ん張って前足を出してボールをつついてマイボールにする方法（フエンシングステップ）が紹介されていた[7)]。このディフェンスは自らフェイントをかけたと考えられるため、これを「前後への動きのフェイント」と分類した。しかしながらこのディフェンスの効果を明らかにした研究はない。

本研究では防御者がどのようなフェイントを使用すれば攻撃者のボールを奪取することに有効であるかを明らかにするため、防御者が自分の行いたいフェイントを選び、相対峙した際にそれを使用したときのディフェンスの有効性を明らかにすることを目的とした。

また攻撃側の選手においても相対峙した際に、この様なディフェンスを行われると「いやだな」、「嫌いだな」など「苦手だな」と感じるディフェンスがある。そこで、前述の設定に加えて防御側が攻撃側の苦手とするディフェンスを行いつつフェイントをかけて1対1の攻防を行った際の有効性についても検討することにした。

そこで実験は、防御者が攻撃者の苦手とする防御方法を知らない場合（実験Ⅰ）と事前に知っている場合（実験Ⅱ）の2実験を行った。

2．方　法

（1）実験Ⅰ

1）被験者

H教育大学男子サッカー部（攻撃者5名、防御者5名、計10名）、M女子大学サッカー部（攻撃者7名、防御者7名、計14名）被験者はすべて右利きであった。

2）実験の手続き

1対1の攻防を試合会場の中央と両サイドについて同じ組み合わせで計3回行った。攻撃者が防御者にパス、それを防御者が攻撃者に返球し、攻撃者がトラップを行ったところから1対1を行う。

防御者には自由に自己の考えたフェイントを試行ご

とに行わせた。つまり、3回の1対1において同じものを使用してもいいし、逆に毎回変えてもいいということである。

組み合わせは男子5組、女子7組の計12組となった。全試行数は36試行である。

組合せはH教育大学男子サッカー部では

〈FWとDF の組み合わせ〉

1．　Y　　vs　　S

2．　M１　vs　A

3．　I　　vs　N1

4．　T　　vs　N2

5．　M2　vs　K

M女子大学サッカー部では

〈FWとDFの組み合わせ〉

1．I１　vs　　N

2．M1　vs　　Y1

3．W　vs　　S

4．K　　vs　　M3

5．M2　vs　　H2

6．H1　vs　　I3

7．I2　　vs　　Y2

3）アンケート調査

攻撃者12名に対し、防御者がフェイントしてくる1対1の実験の感想を試行後に求めた。

アンケート調査①：防御者からフェイントをかけられての1対1を行ってみて抜きやすかったですか？抜きにくかったですか？

アンケート調査②：防御者が行ったフェイントでどのフェイントが一番嫌だと感じましたか？

4）防御者が使用したフェイント

使用したフェイントは「前後」、「左右」、「キック」、「クロスステップ」の4種であった。図1は「前後」、図2は「左右」、図3は「キック」、図4は「クロスステップ」のフェイントの動きを示している。「前後」のフェイントについては前述の後ろから前のフェイントと前から後ろのフェイントのいずれか行いやすいほうを選択させた。「左右」のフェイントも同様である。キックおよびクロスステップは被験者全員が右利きだったので左足を軸足としてフェイントを行った。

（2）実験Ⅱ

1）被検者

実験Ⅰの被検者全員が参加した。

2）実験の手続き

実験の手続きは実験Ⅰと同様であるがこれらに加えて、今回の1対1は事前に防御者が攻撃者の嫌がるディフェンスを知っており、それを行いつつ、フェイントを仕掛けるという実験を行った。

3）アンケート調査

図1　前後のフェイント

図2　左右のフェイント

図３　キックフェイント

図４　クロス・ステップ

アンケート調査①

　被検者の攻撃者全員（男子5名、女子7名）に「1対1において自分が相手にされたくない（苦手とする）ディフェンスは？」の質問を行った。

アンケート調査②

　M女子大サッカー部の攻撃者群には実験後、防御者から自己の嫌だなと思われるディフェンスを行いながらフェイントを行われた際の感想を調査した。

アンケート調査③

　防御者群には相手の嫌がるディフェンスを行いながらフェイントをかける1対1を行ったことに対する感想を調査した。

４）統計処理

　2実験間の成功数の有意差をχ^2独立性の検定（2×2分割表検定）を用いて明らかにした。

３．結　果

（1）実験Ⅰについて

（1）各DF被験者の1対1の成果

H教育大学男子サッカー部では

N1君		
場所	**フェイント**	**成否**
中央	左右	失敗
右サイド	前後	成功
左サイド	前後	失敗
N2君		
場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	失敗
右サイド	左右	失敗
左サイド	左右	成功
S君		
場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	失敗
右サイド	前後	失敗
左サイド	左右	失敗
K君		
場所	**フェイント**	**成否**

中央	キック	失敗
右サイド	左右	失敗
左サイド	キック	失敗

A君

場所	**フェイント**	**成否**
右サイド	左右	失敗
左サイド	左右	失敗

M女子大学では

Y1さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	成功
右サイド	キック	成功
左サイド	前後	失敗

M3さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	成功
右サイド	前後	失敗
左サイド	前後	失敗

I3さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	失敗
左サイド	前後	失敗

Y2さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	クロスステップ	失敗
右サイド	クロスステップ	失敗
左サイド	左右	失敗

Sさん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	失敗
右サイド	前後	失敗

H2さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	失敗
右サイド	前後	成功
左サイド	左右	失敗

Nさん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	成功
右サイド	前後	成功

H教育大学のA君の中央、M女子大学のI3さんの右サイド、Sさんの左サイド、Nさんの左サイドのでは防御者がフェイントをかける前に勝負がついていたため結果から削除した。

そのため、中央部では11試行、右サイドでは11試行、左サイドでは10試行の計32試行が分析に採用された。

フェイントの種類別・場所別・試行数と成功数を表１に表した。

表１　フェイントの種類別・場所別・試行数と成功数

（成功数/試行数）

	中央	右サイド	左サイド
前　　後	3/8	4/6	0/4
左　　右	0/1	0/3	0/6
キ ッ ク	0/1	1/1	
ク ロ ス	0/1	0/1	

（2）成功試行について

中央部では11試行中3回、右サイドでは11試行中4回、左試行では10試行中1回の成功例がみられた。

（3）フェイント別成功例について

中央部では11例中8例が「前後のフェイント」が使用され、3回成功していた。そのほかには「左右」、「キック」、「クロスステップ」などは1回ずつ使用されていた

がすべて失敗であった。

右サイドでは、11試行中前後のフェイントが6回使用され、3回成功していた。左右は3回使用されすべて失敗、「キックフェイント」は1回使用され成功、「クロスステップ」は１回使用され失敗であった。

左サイドでは10試行中、「前後のフェイント」が4回使用されすべて失敗、「左右のフェイント」が6回使用され1回成功していた。

（4）ボール奪取失敗の内容

防御者がフェイントを行う中で、相手に突破されたのはどのような状態のときであるかを明らかにした。

中央部

・「前後のフェイント」: 前に行ったときに抜かれた（5回)。下がろうとしたときに抜かれた（3回)。
・「左右のフェイント」: 右にずれた瞬間に左へ抜かれた（1回)。
・「キックフェイント」: 右足で行ったが軸足側の左を抜かれた。
・「クロスステップ（右から左）のフェイント」: 足を右に戻した瞬間に抜かれた（1回)

右サイド

・「前後のフェイント」: 前に出たときに抜かれた（2回)。
・「左右のフェイント」: 右に重心が移った時に左へ抜かれた（2回)。左から右、右からから左に重心を動かしたときに抜かれた（1回)。
・「クロスステップ」: 右から左へクロスしている間に左側を抜かれた（1回)。

左サイド

・「前後のフェイント」: 前に出たときに抜かれた（4回)。
・「左右のフェイント」: 右にずれ、左に戻る前に左に抜かれた（4回)。左にずれたときに右に抜かれた（2回)。前後のフェイントの失敗は11回みられ、すべて前に行ったときに抜かれていた。

（5）成功に関する分析

有効試行数32中、8回の成功試行が見られた。25%、つまり4回に1回成功するという結果であった。フェイント別にみると前後のフェイントの成功率が高い（18試行中7回成功：成功率38.9%)。左右のフェイントは10試行中0回、キックフェイントは2回中1回、クロスステップフェイントは1回中0回であった。

（6）アンケート結果について

1対1を行っている際に防御者がフェイントを仕掛けてきたことに対する攻撃者の感想は男子（H教育大学男子サッカー部）と女子（M女子大学サッカー部）で大きく異なった。男子5名全員が普段の1対1よりも抜きやすかったと答え、女子では逆に7名中6名が普段の1対1よりも抜きにくかったと回答した。

かけられて嫌だなと感じたフェイントは男子では全員「前後のフェイント」であった。女子ではすべての被検者がフェイントをかけられるのは嫌だと感じており7名中3名が「前後のフェイント」とが嫌だと答えていた。つまり「前後のフェイント」は12名中8名が「嫌なフェイント」と感じていた。

（2）実験Ⅱについて

1）アンケート調査①の結果について

H教育大学男子サッカー部では5名中3名（M1、Y、T）が「スペースを空けられる（間合いを空けられる)」。1名（M2）が「接近戦（間合いを詰められる)」、1名（I）が「タッチラインであった側に追いやられる」。であった。M女子大学サッカー部では7名中6名（M1、W、K、M2、H1、I2）が「スペースを空けられる（間合いを空けられる)」、1名（I1）が「接近戦（間合いを詰められる)」であった。K国際大学の男子10名女子31名を対象とした調査では、苦手（いやだな）と感じるディフェンスはスペースを空けられる19名、間あいを詰められる22名であり、この2つに大別されていた。

2）各ディフェンス被験者の1対1の成果

H教育大学男子サッカー部では

N1君

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	成功
右サイド	前後	成功

左サイド	前後	失敗

N2君

場所	**フェイント**	**成否**
中央	キック	失敗
右サイド	前後	成功
左サイド	クロス	成功

S君

場所	**フェイント**	**成否**
中央	キック	失敗
右サイド	前後	成功

A君

場所	**フェイント**	**成否**
中央	クロス	失敗
右サイド	クロス	失敗
左サイド	クロス	失敗

K君

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	失敗
右サイド	クロス	成功
左サイド	前後	失敗

M女子大学サッカー部

Y1さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	クロス	成功
右サイド	前後	成功
左サイド	前後	失敗

M3さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	失敗
左サイド	前後	失敗

I3さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	クロス	成功
左サイド	クロス	失敗

Y2さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	成功
左サイド	クロス	失敗

Sさん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	成功
右サイド	キック	成功
左サイド	前後	失敗

H2さん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	前後	成功
右サイド	クロス	成功

Nさん

場所	**フェイント**	**成否**
中央	キック	失敗
右サイド	前後	成功
左サイド	前後	失敗

H教育大学男子サッカー部のS君の左サイド、M女子大学サッカー部のM3さんの右サイド、I3さん

H教育大学男子サッカー部のS君の左サイド、M女子大学サッカー部のM3さんの右サイド、I3さんの右サイド、Y2さんの右サイド、H2さんの左サイドでは防御者がフェイントを仕掛ける前に勝負がついていたため結果から削除した。

そのため、中央部では12試行、右サイドでは9試行、左サイドでは10試行の計31試行が分析に採用された。

３）成功試行について

中央部では12試行中6回（成功率50%）、右サイドでは9試行中7回（成功率77.8%）、左サイドでは10試行中1回（成功率10%）の成功例が見られた。全試行の成功率は48.4%（31試行中15成功）であった。

表２にフェイントの種類・場所・成功数について表した。

表２　フェイントの種類別、場所別成功数

（成功数/試行数）

	中央	右サイド	左サイド
前　後	4/6	5/5	0/6
キ ッ ク	0/3	1/1	
ク ロ ス	2/3	2/3	1/4

中央部では12試行中、前後のフェイントが6回使用され、4回成功（成功率66.7%）していた。キックフェイントは3回使用され、成功例なし。クロスステップは3回使用され、2回（成功率66.7%）成功であった。

右サイドでは9試行中前後のフェイントが5回使用され5回成功（成功率100%）、クロスステップが3回使用され2回成功（成功率66.7%）、キックフェイントが1回使用され失敗であった。

左サイドでは10試行中前後のフェイントが6回使用されすべて失敗。クロスステップが4回使用され1回成功（成功率25%）であった。

４）実験ⅠとⅡの比較

実験ⅠとⅡの成功数を比較すると、中央部：3対6、右サイド：5対8、左サイド：0対１であり、実験Ⅱのほうが明らかに成功数は多くみられた。

５）防御者が攻撃者の「苦手」なディフェンス を知らない場合（実験Ⅰ）と知っている場合（実験Ⅱ）との防御成功数の統計的検討

実験Ⅰでは有効試行数32中8回成功し、実験Ⅱでは有効試行数31中15回成功例がみられた。そこで２つの実験の成功数について有意な差の検討をχ^2独立性の検定で行った。その結果、χ^2値は3.715であり、有意水準0.05のχ^2値3.841よりも若干小さく$0.05<p<0.10$（2.706）の間にあった。よって有意傾向であると判定した[9)]。

このことは実験Ⅱで行った、相手防御者の「苦手」だと感じているディフェンスを行いつつフェイント動作を行ってボール奪取を試みる防御方法はかなりの効果をもたらすことを示している。

男女別にみた場合、男子では成功数が2回から6回に増加し、女子では6回から9回に増加していた。男女とも実験ⅠとⅡの間に有意な差は認められなかった。

６）アンケート調査②の結果

攻撃者（7名）に防御者から自分の嫌だと思っているディフェンスを行われつつ、フェイントをかけられる1対1を行った後の感想についてみると、7名中6名は普段の1対1を行う時よりも抜きにくかったと回答した。1名は抜きやすかったと回答したが、フェイントをかけられるのは嫌だと感じていた。

7）アンケート調査③の結果

攻撃者の「苦手」なディフェンスを行いながらフェイントをかけて行う防御を行った感想は7名中5名がボールを奪取できた・できそうと答え、2名が抜かれやすいと回答した。

４．考　察

（1）実験Ⅰについて

32試行で8回の成功が見られたが防御者がフェイントをしない通常の1対1とどちらが有効であるかは今回の実験では判別できない。しかし目的で述べたようにボール競技はボール保持者が絶対的に有利であることを考え合わせると4回に1回はボールを奪取できることは試してみる価値はあると考えられる。

成功率の高かった前後のフェイントについてみると、中央部では8試行中3回の成功であったが、右サイドの6回中4回の成功に比して低率であった。中央部では攻撃者がフェイントをかけられた際に、左右どちらにでもボールを動かすスペースがあるために逃げることが

できたためと考えられる。右サイドでは攻撃者はボールを右足で操作するため、タッチライン沿いにはボールを操作できず内側に入るため防御側との間合いの距離が近くなり、フェイント効果がより見られたものと考えられる。

左サイドでは防御側のフェイントは効果がない結果であった。

前後のフェイントの成功数が左右のサイドで異なっていたことについてみると、両サイドのディフェンスとも内を切って縦に行かせる方法をとっていた。ゴールから向かって右のサイドで行う場合、攻撃者はボールを右足前に置くためライン沿いでなく、自然と防御者に近いところでボールを操作する。防御者は右利きなので右足を操作するため軸足は左足となり、相手に近い位置をとる。つまり相手が縦に抜くときに対応する右足は進行方向にありボールをはじきやすい。左サイドでは逆に攻撃者はライン沿いに右足で操作し、防御者からは遠いところでボールを操作する。防御者は右足前の体勢をとるので攻撃者がアクションを起こしたとき非利き足で対応することになり若干の遅れが生じ、ボール奪取が困難になっていたものと考えられる。

キックフェイントでは相手が丁度突破しようとしているときにフェイントを行うとボールを奪取できる場面があった。これは相手が仕掛けてきそうなタイミングを見計らってフェイントを行えばボールを奪取できるのでフェイントをかけるタイミングが重要であることが理解された。

フェイントを使用した際に男子では抜きやすいと全員が答え、女子では7名中6名が抜きにくいと全く真逆の回答が得られた。このことは女子では高藤[8]の研究（日本女子サッカー選手にみられるフェイント技術に関する一考察：未発表）でも明らかにされたように女子では試合中に男子に比べてフェイントを使用する回数は極端に少なく。1対1よりもパスワークにてゲームを組み立てることが重視されており、1対1の経験が乏しく、防御者に先にフェイントをかけられると慌ててしまい対応が遅れ、ボールを取られるものと考えられる。男子では攻撃者がタイミングを図り、防御者にフェイントをかけようとする際、逆に防御者のほうが先に動くためその逆を取りやすくその結果抜きやすいとの回答になったものと推察される。

（2）実験Ⅱについて

防御者に攻撃者の嫌がる（苦手とする）ディフェンスを知らせたうえでフェイントを行わせたほうが中央と右サイドではボールを奪取できる確率が高いことが認められた。中央と右サイドで効果の見られたことは防御者が攻撃者の「苦手な」ディフェンスを知らないときの1対1の攻防結果と同じであり、実験Ⅰに比して成功数がより多く見られたことになる。逆に左サイドではほとんど実験Ⅰ、Ⅱとも効果がないことが認められた。このことは左サイドバックには左利きの選手を配置すべきことを表している。

男子では有意差は無いとはいえ2回から6回と成功数が増加していることは、今回アンケート調査は行っていないが、実験Ⅰでは全員抜きやすかったと回答していたが実験Ⅱでは少しではあるがは抜きにくいと感じる者も居るのではないかと推察される。

攻撃者の「苦手とする・嫌だなと思う」ディフェンスを仕掛けつつフェイント動作を加えることで飛躍的にディフェンス効果が向上したことは今後、採用する必要性が高いことを示唆している。

以上のことは、今後、視覚的な分析がより一層重要性を増すことを示唆している。すなわち、ディヴィッド・サンプターは視覚的な分析が完全なスカウト代わりになるまでは、まだまだ研究が必要だが、流れ場（ストライカーのドリブルの方向や行い方、ある選手がディフェンダーの左右どちらをすり抜けようとする傾向があるのか、その選択がディフェンダーとの距離に応じてどう変化するのか）を用いて個々の選手を特徴づけることなら既に可能だとしている[2]。サンプターの例は攻撃者について述べているが、今回の研究に置き換えれば、防御者が対峙するだろう相手が1対1でボールを奪

われるシーンを視覚的情報で収集し、それを分析することによって相手が苦手とするディフェンス方法を事前に知っておくことになる。

５．要　約

本研究では、1対1の攻防において防御者が積極的にボール奪取を試みた場合の有効性について検討した。すなわち、防御者がフェイントを行ってボール奪取を試みる実験Ⅰと防御者があらかじめ攻撃者の苦手とするディフェンスを行いながらフェイントをかけてボール奪取を試みる実験Ⅱを行った。使用されたフェイントは「前後」「左右」「キック」「クロスステップ」の4種であった。男子(10名)、女子（14名）計24名の被検者を攻撃群12名、防御群12名に分けた。それぞれを組み合わせ試合会場の中央と左右サイドで3回試行させた。

ディフェンス時に防御者がフェイントをかけて防御を行った実験Ⅰの結果についてみると、32試行数に対する成功数は8例であり、成功率25.0％であった。

相手が苦手とするディフェンスを行いつつフェイントを使って防御した際の結果では31試行に対して15例成功しており、成功率は48.8％であった。実験Ⅰと実験Ⅱの成功数の差には有意傾向（.05<p<.10）が認められ、実験Ⅱのほうが　より有効なディフェンス方法であることが認められた。

今回使用したフェイントのうち、最も成功数が多かったのは「前後のフェイント」であった。特にゴールから見て右サイドでの有効性が大きかった。

文　献

１．ボカ・ジュニアーズ・フィアルジャパン（2017）球際と攻めの仕掛けが強くなる.池田書店：東京，pp.70-81.

２．ディヴィッド・サンプター（2017）サッカーマティクスー数学が解明する強豪チーム「勝利の方程式」－株式会社光文社：東京，p.96

3. ジーコ（1996）ジーコの考えるサッカー.日本放送出版協会：東京,pp.60-63.

4. 川島和彦，吉田和史（2014）運ぶドリブル＆抜くドリブルをマスターする本．マイナビ：東京，pp.128-141 .

5. 前田秀樹（2003）サッカーの戦術＆技術．新星出版社：東京：pp.124-129.

6. 西野　朗（1998）勝利への戦術：サッカー実践編．成美堂出版：東京，pp.70-71,74-77.

7. 成美堂出版部（2001）サッカーが突然うまくなる．成美堂出版：東京，pp. 28－37

8. 鈴木正治･秋田豊･山田栄一郎（2016）ディフェンス（サッカー）ストライカーデラックス特集，学研プラス:東京，pp. 22－23

9. 高藤順（未発表）日本女子サッカー選手にみられるフェイント技術に関する一考察

10. 田中　敏・山際勇一郎（2016）新訂ユーザーのための教育・心理学統計と実験計画法、教育出版：東京，pp. 39.

11. 富樫剛一（2009）サッカー攻撃メソッド，大泉書店：東京，pp. 104－105

12. 土屋健二（2009）サッカー個人戦術バイブル，カンゼン：東京，pp.47－51